様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２３　年　６　月　３　日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０１８７
研究課題名（和文）　日本近代のイタリア旅行記に見る西洋文化移入の総合的研究

研究課題名（英文）　A general study of the Western culture introduction in the Japanese traveler's diary on Italia in Japanese modern times

研究代表者
真銅　正宏（SHINDO MASAHIRO）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：８０２４３６７４

研究成果の概要（和文）：日本近代におけるイタリア関係の旅行記事の一覧、およびＰＤＦファイル化されたデータベースを作成した。これらの記事の通覧から、近代日本における日本人旅行者たちのイタリア諸都市への訪問が、近代日本のヨーロッパ理解の一つの特徴を形成していることが明らかになった。例えば、諸都市をめぐるツアー形式の観光旅行という形が、表層的な西洋理解に影響及ぼした点や、ホテルに宿泊することにより、他国の文化の身体的理解を行う点、また食文化の相違の体験による文化理解の困難さへの直面などである。これらが日本近代の異文化理解の一つの類型を形成したものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：I made a database made the list of the Italy in Japanese modern times-affiliated trip article and a PDF file.　It became clear that the visits from the overview of these articles to the Italian many cities of Japanese tourists in modern Japan formed the characteristic of the one of the European understanding of Japan in modern times.　For example, a point understanding of the body of the culture of other countries is confrontation to difficulty of the culture understanding by the experience of the difference in food culture because form called the sightseeing tour of the tour form around many cities stays at influence a point and the hotel where I gave it to for outer layer-like Western understanding.　It is thought that these formed the one of type of the cross-cultural understanding of Japanese modern times.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：国文学、イタリア

１．研究開始当初の背景

申請者は、平成１７年度から１８年度にわたる２年間に、西洋音楽という起因によってもたらされた、近代日本における文化的変化の結果を総合的に探究するべく、「日本近代の雑誌メディアにおける西洋音楽およびオペラ受容の総合的研究」という研究課題で、科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ））を受けて研究を行った。そこで明らかになったことは、移入された西洋文化の内面的な影響は、

日本近代の中で、文化の外形的な変化から、時間を経て、徐々に根付いていくという事実であった。またその際に、日本の伝統的な文化とそっくり入れ替わるのではなく、それとのせめぎ合いのなかで取捨選択され、一定のものだけが受け入れられるということ、そしてそこに文化の混淆が生じるということも明らかになった。

このことが西洋音楽という特殊個別の起因についてのみ生じた事象であるか否かについては、今後さらに、他の西洋文化の移入の実態研究を重ねることにより、検討されなければならない。しかしこれらの検討には、もう一つ重要な検討が必要であることも明らかになった。それは、日本国内における西洋文化移入の検討に加えて、日本人の西洋における実地見聞の実態研究である。交通事情により、海外渡航者が現代ほど多くはなかったと想像される明治期・大正期・昭和戦前期において、日本人たちが西洋に赴き、そこで体験したことは、日本にいる日本人たちにとって、大きな影響力をもっていたものと考えられるからである。

本研究は、あらゆる職業や立場で西洋に渡った日本人たちの西洋紀行文・西洋案内記を対象に、その西洋に対する視線を総合的に探究することを目的とする。本申請においては、その対象を、明治・大正・昭和戦前期におけるイタリアに対する視線に絞り込み、これを行うことにしたい。日本におけるヨーロッパ・イメージをリードしてきたのは、やはりイギリス・フランス・ドイツであると一応は認められよう。これに対しイタリアは、これら三国とも密接に関係をもちながら、ヨーロッパのなかでは、日本との関係において独特の相貌を示してきた。その要因としては、先ず第一に、ローマという古都をもち、ローマ法王を中心にキリスト教文化の中心としての長い歴史を持つことが挙げられよう。さらに、イタリアの諸都市のイメージが、ローマという一都市に集約されず、ミラノやフィレンツェ、ヴェネチア、ナポリなど、それぞれ個性に富み、旅行者に多彩な印象をもたらし、キリスト教信者の少ない日本人にとっては、留学先や修行の地ではなく、あくまで観光旅行に訪れる土地であったことも、実に特徴的である。

これらの点から、日本近代におけるヨーロッパ・イメージの形成を総合的に探究するに際し、ロンドンやパリ、ベルリンとの対照性において、有効な視点が期待できると考え、申請するに至った。

２．研究の目的

日本の近代化は、とりあえずは西洋化であった。明治になり、海外への交通がより自由になった時、進取の思いの強い一部の日本人たちは、政治や経済、社会のシステムや医学、文化や芸術などを学ぶために、それぞれの先進国である、イギリスのロンドンやフランスのパリ、ドイツのベルリンなどに留学した。新しい国ではあるが、ヨーロッパ文化の継承者でもあるアメリカ合衆国の、例えばニューヨークなどに渡った者たちもいる。

やがて日本が次第に国力を蓄えていった時、あらためて感じ取られたのは、欧米、特にヨーロッパにおける、新しい社会の根底に流れる、古い伝統と文化の存在であった。ヨーロッパは、近代の日本にとって、文化を発展させるための案内人であると同時に、古き文化を同時に残す模範例でもあった。

ところで、このような新しさと古さの同居は、同じヨーロッパの中でも、当然ながら差異があった。イギリスのいわゆるオックスブリッジ、すなわちオックスフォード大学とケンブリッジ大学では、卒業までに、自ら企画した旅行をする習慣があったが、多くの学生が、ヨーロッパの中でも古い遺跡を多く残すイタリア、特にローマを訪れた。ローマに代表されるイタリアは、文化を代表する国であった。そこには、古きローマ帝国の遺跡、それ以前のギリシア文化の残存、さらに、カソリックの総本山であるバティカンに代表される、キリスト教文化、そしてルネッサンスの芸術など、いくつかの時代の文化が重層的に存在している。さらに当代においても、美術や音楽、演劇の最先端を疾走している。

しかしながら、実学的な西洋文化を移入することに急であった明治に典型的であるように、多くの日本人たちは、この地に留学し、滞在して学ぶことは意外に少なく、多くが観光を目的として、イタリアを訪れたのである。ここに、日本とイタリアという国の関係における、ヨーロッパ諸国の中での特殊性が見て取れる。

イタリアは、近代の日本にとって、学ぶ国というより、遊ぶ国であった。第一次世界大戦の戦敗国であったことも、この認識に拍車をかけたようである。

しかしながら、先進文化の移入は、もちろん実学的側面だけでは不十分である。日本人留学生は少なかったが、日本人旅行者として、訪問する者は極めて多いイタリアは、日本が学んだ西洋の実像を明らかにするために、も一つのヒントを与えてくれる。ヨーロッパが近代日本に与えたもう一つの文化的な影響を明らかにしてくれるはずなのである。

本研究は、このような、イギリスやフランス、ドイツとは違う形で日本人が訪れたイタリアについて、当時の日本人旅行者たちが書いた旅行記や紀行文を題材に、その特異性を明らかにしようとするものである。その特異性は、近代日本におけるヨーロッパ文化の移

入の実像を探る上で欠かせない、非実学の側面を典型的に照射してくれるであろう。

明治から昭和初期にかけて、多くの日本人がヨーロッパに渡った道筋は、インド洋から紅海を経て地中海に抜ける、船の長旅であった。このルートは、フランスのマルセイユに上陸し、鉄道でパリに向かうものが多かった。その途中、船はイタリア半島とシチリア島の狭い海峡を通り抜け、多くがナポリに寄港し、ジェノバから上陸する場合もあった。イタリアは、多くの日本人にとって、正しくヨーロッパの入り口であった。イタリアの海岸の印象こそが、多くの日本人たちにとっての、初めてのヨーロッパであった。イタリアを始めて訪れた日本人たちの描く個々の旅行記や紀行文は、近代日本というものが始めて触れたヨーロッパ文化の印象全体を、実に正確になぞり、追体験するものと考えられるのである。

３．研究の方法

イタリアに限らず、これを含む西洋旅行記の全体像を明らかにする必要がある。

これまでの西洋記述は、当然のことながら、政治家や文学者、画家など著名人によるものが多い。特に小説家は、日記や紀行文とともに小説や詩を創作することによって、広く流通する西洋イメージを形成してきたといっても過言ではあるまい。これら既存の西洋イメージを相対化するためにも、著名人に限らない、あらゆる立場の人々の見聞録や紀行文を網羅的に集めることが肝要であると考えられる。

具体的作業としては、書籍として出版されたイタリア旅行記を含む書籍の現物所在を図書館等において確認し、イタリア関係記事を収集する。そしてそれらを、西洋紀行文・西洋案内記関係書籍一覧としてデータベース化し、イタリア関係記事については、ＰＤＦファイル化をも進めたい。そのデータベースに基づき、イタリアの特殊性と共通性とを明らかにする。

幕末に幕府によって派遣された使節の見聞録や、昭和戦中期の海外での反応をも含め、具体的な期間としては、幕府の軍艦咸臨丸が米国訪問に出発した１８６０年（安政７年）から、太平洋戦争終戦の１９４５年（昭和２０年）を対象期間とする。

４．研究成果

目的どおり、イタリア関係の旅行記事の一覧およびＰＤＦファイル化されたデータベースが完成した。これらの記事を通覧すると、近代日本における日本人旅行者たちのイタリア諸都市への訪問が、その後の日本のヨーロッパ理解の一つの特徴を形成していることが明らかになった。これまで、西洋といえば、フランスのパリやイギリスのロンドン、ドイツのベルリンなどからの移入を中心に捉えられてきたが、これらの「西洋」の像とは別の形で、イタリアは近代日本に影響を与えている。詳しくは、発表した論文に記したが、ここではその代表的なものを三点、列挙しておきたい。

第一は、諸都市をめぐるツアー形式の観光旅行という形での、表層的な西洋理解についてである。日本近代においては、西洋に訪れることは現代に比べ、時間的にも金銭的にも極めて困難なことであり、したがって、一度訪れた都市には、ある程度の期間滞在することが通常である。しかし、イタリアは以下に述べるような理由から、ツアーを以て通常の訪問形式としている。第二は、第一の特徴とも密接に関わるが、ホテルに泊まることにより、他国の文化の身体的理解を行う点である。これについても、長期滞在の場合は、下宿などに移るのが通常であるが、観光ツアーは決まってホテル滞在であり、そのために、やや違った西洋文化理解が起こったものと考えられるのである。第三の特徴としては、食文化の相違による文化理解の困難さへの直面である。イタリアの食材は比較的に日本人の口には合ったものと考えられるが、そのために、これを記事にして日本人に伝えようとする欲望が起き、しかしながらその伝達が実際には困難である、という言語上の問題にぶつかるのである。これもまた、西洋文化移入や異文化理解の一側面を代表する。以下、順にこれらを見ていきたい。

（１）ツアーという訪れ方

日本人がイタリアを訪れるルートには、これまで見てきた例によると、大きく二つのものが多い。一つはナポリに船で入るものである。もう一つは、スイスからトンネルを抜けて列車で入るものである。もちろんその他に、ジェノバからフランスに抜けるルートもあるし、昭和に入ると飛行機によって空路で入るというルートも開かれたが、多くの日本人たちが、ナポリから、あるいはミラノやベニスから旅行を始めている。

このことは、さらに次のことを示す。すなわち多くの旅行者がローマを目指すとしても、必ずといってよいほど、他の街を経由してローマにたどり着いたということである。そのため、旅行者たちのイタリアの印象は、ローマに中心化されず、むしろローマの他にどこを訪れたのかによって特徴づけられる場合が多いのである。

したがって、これまで書かれた旅行記や案内記に書き留められたイタリアのイメージは、実に多様性を示すものとなっている。この複雑なイタリア・イメージは、日本人旅行

者のきまぐれを示すというより、イタリアという国の、ヨーロッパ諸国の中に占める特別な意味合いを反映しているものと思われる。日本人旅行者にとって、フランスの代表的なイメージはほぼパリによって、またイギリスのイメージは同様にほぼロンドンによって形成されるのに対し、イタリアにおけるローマのイメージはさほど単純ではないのである。これは、多くの都市国家的王国によって出来上がった、イタリアという国のそもそもの成り立ちの特殊性を未だに反映しているためかもしれない。イタリアの諸都市は、ほぼ対等に、それぞれのイメージを日本人に与えてきた。これが、イタリア旅行の特徴的な性格をも作り上げた。その特筆すべき性格こそが、「諸都市歴訪」、いわゆるツアーというスタイルである。

フランスを訪れる際、パリだけに長期滞在するスタイルはよく見られる。しかし、ローマに長く滞在することはあっても、その際にナポリを訪れない旅客は稀である。ミラノとベニスとフィレンツェも同様の関係にある。

このように諸都市を歴訪するというスタイルが、忠実に、イタリア・イメージの多様性をなぞっている。多くの旅行者は、一つの国をツアーという形式で経巡るのである。

ツアーは、今でも日本人旅行客の多くが採る旅行形態である。もちろんそこには、いかに効率的に多くの場所を周り、いかに諸費用を安く抑えるか、という経済の原理も働いている。団体旅行の場合はなおさらである。

しかし、効率よく多くの場所を見て回るためには、一つの箇所でゆっくりするというもう一つの旅の楽しみを犠牲にしなければならないことはいうまでもない。そのために、多くの場所の印象が、往々にして散漫なものともなってしまうであろう。

日本人旅行者のイタリア・イメージにも、この功罪がおそらく影響している者と思われる。彼らはイタリアの多くの都市を訪れるために、個々の都市のそれぞれについては、浅く広く触れることしか出来ない場合が多いのである。そのために、イタリアの印象は、パリやロンドンのそれと比べ、多様で複雑で単一化されないものとなり、またその分、パリやロンドンほども集約されにくいのではなかろうか。

日本人旅行者の見たさまざまなイタリアとは、正しく、イタリアのさまざまな都市の特徴とその歴訪によって生まれた、必然的な印象なのである。

（２）ホテル事情から見える「観光」の性格

ローマのホテルについて見た際にも触れたが、例えばエクセルシオールなど、いわゆるチェインのホテルは、イタリア各都市に用意され、前の都市で予約しておいてでかけることも多かったのであろう。しかしながら、同じホテルばかりに泊まり続けることもできない。ホテルの予約は、心労の一つであったものと考えられる。今でこそ、予約は容易であるが、言葉について不慣れである上に、このような各都市を歴訪するというスタイルを採る場合には、予定が狂うこともあるし、ホテルを確保できるということは、想像以上に安心感の伴う大切なことであったと思われる。また、当時ヨーロッパを訪れることのできる人々は、安宿に泊まるという選択肢も選びにくかったものと見えて、常に第一等か、悪くてホテル・ガルニに宿泊している。この他にも、pension と呼ばれる宿もベデカーには紹介されている。しかしながら、安全のためにも、無理してでも第一等に泊まり、さらに次の都市へと移っていく旅行は、かなりの苦難が想像されるのである。

例えば大都市に長期滞在する場合は、宿を一つ決めてしまえば、このホテルの心配は免除される。ここに、イタリアの旅行に付きまとう、不安感の一つの要因を見て取るのは穿ちすぎであろうか。

さて、このような観光旅行のジレンマ、つまり、各都市を歴訪して、決められた期間にできるだけ多くのものを見て回りたいが、移動の手段を確保し、かつホテルを次から次へと予約し続けなければならない不便をもつ外国人旅行者は、日本人に限ったことでもなかった。このような不便を解消することで、旅行者を画期的に増やしたのが、トーマス・クックに代表される旅行会社である。トーマス・クックはイギリスに生まれたが、一八五五年には、初めてヨーロッパ大陸に行く団体旅行を組織し、その後も大陸旅行については、本国の旅行斡旋以上に力を注いだ。一八六三年に、パリ・ツアーとスイス・ツアーを成功させたトーマス・クックは、次にイタリアを旅行先として選んだ。これについて、本城靖久『トーマス・クックの旅』（講談社、一九九六年）には次のような記述が見える。

古代ローマやルネサンスのおびただしい文化的な遺産をかかえているイタリアに行くことは、教養ある紳士になるためには必要不可欠と、十八世紀以来イギリスのインテリや上流階級の間ではかたく信じられていた。従って、旅行の教育的価値を高く評価していたトーマス・クックがイタリアを次の標的としたのは非常に自然なことである。

こうして、一八六四年には、一四〇人という大人数のツアーが組織されたのである。

やがて、トーマス・クックは一八九二年に亡くなったが、息子のジョン・メイスンによって、クック社は発展し続けていた。その象徴の一つが、ヴェスヴィオ火山のケーブルカーである。これについても、前掲の本城が次のように述べている。

ナポリ郊外のベスビアス火山の麓から頂上

まで敷設されたケーブルカーの会社が経営困難になったのに目をつけて、ジョン・メイスンは一八八七年にこれを買収した。あまりにも利用者が少ないので、ナポリ在住の作曲家に頼んで作曲してもらったコマーシャル・ソングがあの有名な「フニクリ・フニクラ」の名曲である。この歌は大ヒットしたが、スポンサーがクック社であることは表に出さないという条件で作ってもらったので、あれがクック社の経営する登山鉄道のコマーシャル・ソングであるという由来を知っている人は、いまだにほとんどいない。

イタリアは、トーマス・クックが目につけたとおり、各都市ごとに豊かな観光資源を持つ。これらを見て回るには、移動の手段の確保とホテルの予約が必要となる。それを援助したのが、クック社であり、新たに生み出されたツアーという観光旅行の方法であった。これによって、参加者はよけいな心配なく、観光地を見て回ることが出来る。正しくこのツアーという観光の性格と、イタリアという国の特徴とが、うまく見合っていたのである。この事情を承けて、イタリアを訪れた日本人旅行者もまた、多くが、ローマにさえ長期滞在せずに、複数の都市を回遊したのである。各都市のホテルの名前の共通などは、この事実を承けている。おそらく、外国人たちがツアーで訪れることとなった際、旅行会社は、これを受け入れることが可能かどうかをホテルに打診したであろう。そうして、それができることを表示したホテルが、ガイドブックに掲載され、ますます日本人の宿を、第一等の中でも限定していったものと考えられるのである。都市の観光資源とホテルと移動の手段、そして旅行会社とガイドブックが一体化して、近代における観光なるものの性格を規定していったといえよう。

（３）イタリアの味と文化移入

イタリアにおいて初めての味に接した日本人たちの言葉の機能について、考えてみたい。言葉はいうまでもなく、記号であり、記号表現、すなわちシニフィアンの発音はできても、コードを共有しない他の国の人にとって、そのシニフィエ、すなわち記号内容は、ちんぷんかんぷんのはずである。例えば、初めてピッツァという文字を目にする人にとって、それがどのようなものかはわかりにくい。そこで、例えばマカロニは太うどん、スパゲッティは細うどん、というような表現に置き換えられることになる。確かに両者の形は似ているかもしれない。しかし、両者の味が全く別物であることは、両方食べたことのある人には明らかすぎるほど明らかである。ここに、記号の伝達の困難さが潜んでいる。記号は、シニフィアンを学ぶだけでなく、シニフィエ、すなわち概念の共有がなされないと、正しくは機能しない。

文化の移入の困難とは、この、シニフィエの移入の困難に他ならない。言葉を置き換えるだけなら、スパゲッティをわざわざ細うどんにしなくとも、ただ、スパゲッティという片仮名にするだけでも、最低限の伝達は可能である。しかし、中味は全く伝わったことにはならない。

この、シニフィエの共有こそは、当時の日本にとっての、真の近代化の条件であった。この模索は、現在も続いていると云えるかも知れない。我々も、他国の文化を学び、移入する際に、自国にあるよく似たものに置き換えるだけでは、真の伝達における真の記号解読とは云えないのである。

他の国の文化の理解は、いわばその国をどのように「読む」ことができるかということである。その際の言葉の関わりは大きい。これは、他国の文化記号解読に、言語という、記号の典型が用いられるからである。異文化移入に、言語の記号学が応用されるわけである。他国の文化移入において、その文化の最も尖端にありながら、最も言葉に変換しにくい、料理と味は、そこで起こる文化移入の典型例を我々に示してくれるであろう。

小説などの文学における言葉の意味の伝達は、通常の日常言語のそれと比べて、わざと回り道を強いるような、ややわかりにくいものが多い。これは、その言葉が伝える内容と共に、その際の記号にすぎなかった言葉自体の魅力をも同時に伝えたいという、送り手側の特殊な願望に由来する。したがって、文学的な表現の記号解読は、一般的に困難なものであり、その困難さが克服されたときに、喜びも同時に伝えられることになる。この特殊な伝達形式である文学の理解と、他国の文化を理解する際の、例えば料理など、その文化の尖端にある事例の理解の困難さとは、極めてよく似ていると云える。それぞれが、その伝達の不可能性の部分に、より多くの個性を存しているからである。

他国の文化を理解し、他国の料理を真に味わうことは、言うなれば、文学を十二分に理解することと極めてよく似た行為なのである。

他国のそれや、自国のものであっても、それまで味わったことのない料理を、今までの経験から、うまく味わうことができる人を、食に通じていることから、食通と呼ぶことができる。また、文学をうまく読むことが出来る人は、読み巧者と呼ぶことができる。この食通と読み巧者とは、実によく似ている存在である。その向こう側には、作者と料理人とが位置している。彼らと、料理と文学作品を間において、十分楽しい会話を楽しむこと。全く知らない料理を味わう楽しみと、読書の楽しみには、このような共通点が認められるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①真銅正宏、学者の観察―日本人旅行者の見たイタリア（５）―、人文学、査読有、第 186 号、2010、101－124
②真銅正宏、画家たちの描写―日本人旅行者の見たイタリア（４）―、人文学、査読有、第 185 号、2010、57－90
③真銅正宏、女性の視線―日本人旅行者の見たイタリア（３）―、人文学、査読有、第 184 号、2009、1－23
④真銅正宏、文学者の表現―日本人旅行者の見たイタリア、立命館言語文化研究、査読無、第 20 巻２号、2008、53－66

〔学会発表〕（計１件）
①・真銅正宏、食通文学の記号学――日本人が、見て、食べて、飲んだイタリア――、AISTUGIA（伊日研究学会）、招待講演、2010 年 9 月 16 日、イタリア、ナポリ東洋大学

６．研究組織
(1)研究代表者
真銅　正宏（SHINDO　MASAHIRO）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：80243674

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし